

名探偵ごっこ

第2話 「V.S.名探偵偵！」

きゃくほん：立川佳吾（トランク機会シアター）

音) ピンポンパンポン

あけち 「おはなしがはじまるまえに。へやをくらくして、かいちゅうでんとうをもって、じぶんに
ひかりをあててみると、よりいっそうおたのしみいただけます。

音) ピンポンパンポ
カカン

あけち 「ほら。名探偵。」

主人公「へ？」

あけち「ひかりの中にはいって、そしてきめぜりふ」

主人公「わかった！ええと・・・ぼくは、名探偵・・・」

あけち 「じぶんのなまえ。」

主人公 「ぼくは名探偵○○○○（キミのなまえ）！ひよんなことから、この『虫メガネ』をひろった
ぼくは、ぬいぐるみにかえられた『おじさん』をたすけるべく、このまちにひそむきょうあ
くはんをみつけだすことになったのだ。まってる！はんにん！
メガネはぜんぶ、おみとおし！」

音) きめたなっかんじの

あけち 「すばらしい！いいねいいね。かっこいいよー！よ！名探偵！」

主人公「いまのなに！？」

あけち 「なにって、じこしょうかいだよ。探偵虫メガネのきのうの一つ、じこしょうかいだ！！」

主人公「そんなことより。もっとやくにたつきのうはないの？」

あけち 「・・・やくにたつ？」

主人公「たとえば、あのこがすきなひとがわかつちやうような・・・あつ！」

手で口を押さえる

あけち 「そうかあ！！イヤイヤやらせてしまってるんじゃないかなあとおもっていたが、
わたしのために！ ありがとう！！ありがとう！！！！！！」

主人公 「そ、そうだよー！ ぜったいにおじさんをたすけてあげるからね！」

あけち 「ありがとう。いい人に出会えたなあ。」

主人公 「だから、もっとやくにたつカード、おしえてよ！」

あけち 「ああ。そうだなあ、うーん」

こばやし 「おじゃまします！！！」

こばやしさん どうじょう

こばやしさんどうじょうの曲

こばやし 「ささえつづけて30ねん。名探偵あけちしょうごろうのじょしゅ。こばやしさんです！」

あけち 「こばやしさん！」

主人公 「だれ！？」

こばやし 「あちらにいるせんせいを10さいのころからずーっとなさえつづけている、
じょしゅの こばやしさんです。」

主人公 「10さいから！？すごっ！」

あけち 「そうなんだ。むかしからせんせいせんせいと、したってくれていてね。」

主人公 「へえ。そんな人がいたんだね。」

あけち 「どうだ、みなおしたか。」

主人公 「うん！」

あけち 「しかも、とうじから りょうりがじょうずでね。今はちょうりいんさんもやってるんだ」

主人公 「だからエプロンをしてるのか。」

あけち 「うん。おいしいんだ。おみそしる。」

こばやし 「すごいでしょう？ちょうりいんをしながらのじょしゅ。なーんかきづいたら、こんなに
じかんがたってたのよねえ。」

主人公「へええ」

こばやし 「いつか、せんせいから、今日からキミが名探偵だって、その虫メガネをもらえる日がくる
としんじてたんですけどねえ。いっこうに、こなかったんですよ。わたしだって、わたしだ
って名探偵になりたかったのに。」

主人公「・・・こばやしさん？」

こばやし「だから、その探偵虫メガネをかけて。しょうぶだよ！名探偵！！」

たたかいの曲

主人公「えええええええ！？」

こばやし「わたしに、虫メガネをよこしなさいーい！」

主人公「ちょっと！ぜんぜんしたわれてないじゃないの！」

あけち 「いや、こばやしさんにかぎってそんなはずはないんだが」

主人公「おじさんが そうおもってた だけじゃないのお？」

あけち 「そうだとしても！そもそもの こばやしさんとはちがいすぎる。」

主人公「どうゆうこと？」

あけち 「こばやしさんは、あんなに大きな声でしゃべらない。」

こばやし「なにごちゃごちゃしゃべってるんだー！！しょうぶしょうぶー！！」

あけち 「だから、こばやしさんもはんにんににかをされたのかもしれない！」

主人公「わかった！それじゃあこのめいたんていしんじつモードをつかって・・・」

あけち 「あ、いやあれはぜんかいつかつたらから、こんかいはつかえないんだ。」

主人公「なんで!？」

あけち 「一かい休みってやつだ。」

主人公「じゃあ、どうしたらいいのさ!？」

こばやし「しょうぶはかんたんだよ。」

主人公 「あ。こばやしさんには言っていないんだけどなあ・・・」

こばやし 「その探偵虫メガネをかけて、どっちが先にはんにんをみつけれられるか しょうぶだよ。」

主人公 「はんにん？はんにんって、おじさんをぬいぐるみにかえたはんにん てこと？」

こばやし 「そんなことどうでもいいいいああ！！！！今、このいえでおきている大もんだいよ。」

主人公 「今おきている大もんだいといえば、おふたかたのそんざい。」

こばやし 「チガー———ウ！！今、このいえでおきてる大もんだい、それは、でんきだいよ！」

主人公 「でんきだい??」

こばやし 「このいえにはいるときに、いえの人からきいたの。このいえのでんきだいが、上がりつづ
けて いるとね。」

主人公 「え・・・」

こばやし 「だから、さきにそのはんにんをみつけれられたほうが 勝ちよ。」

あけち 「むむ。これはなんだいだぞ。」

主人公 「いや、あの」

こばやし 「では、しょうぶ、かいし——！！！」

カーン

あけち 「むむ。どうすれば・・・。」

こばやし 「しょうぶアリー！」

あけち 「どういうことだ？」

こばやし 「はんにんがわかったということですよ。」

主人公 「え？」

あけち 「ばかな、なにもしらべていないのにわかるはずが。」

こばやし 「わかるんですよ。この、じはくきょうせいビームがあればね。」

主人公 「じはくきょうせいビーム・・・？」

こばやし 「このビームをあびせればだれでも、たとえそれがほんとうのはんにんじゃなかったと
しても、はんにんですとじはくしてしまうんです。」

あけち 「なんておそろしいものを。」

こばやし「さーて、どっちをはんにんにしてあげようかなあ。」

主人公「キミのまけだよ。」

こばやし「え？」

主人公「キミのまけ。」

こばやし「はんにんがわかったとでもいうの？」

主人公「そうだよ。」

こばやし「ばかな。」

主人公「だって、はんにんは・・・」

三れんぞくの、シャンシャンシャン（きんだいちょうねんみみたいな音）

主人公「ぼくだから！！」

チーン

こばやし 「え？」

主人公「だって、このまえはれいぞうこをあけっぱなしにしてめちゃくちゃおこられたし、そのまえ

なんて、れいとうこあけっぱなしにして、アイスぜんぶとかしちやっただもん！」

あけち 「たしかに。このいえでおきてるじけんなら、はんにんはかぎられてくるな。

まったく、なんじけんではなかったということか。」

こばやし「そんな。そんな。わたしがまけるなんて――！」

あけち 「たのむ。こばやしさんを、たすけてやってくれ」

主人公「どうしたらいい？」

あけち 「ちゆカードを。」

主人公 「これかな？」

あけち 「それをセットしてチェンジ名探偵。ちゆモードって、やさしいほほえみをうかべながら

いうんだ。」

主人公「わかった。チェンジ名探偵、ちゆモード。」

音) 名探偵 ちゆモードホワわわわーん

こばやし「は！わたしはいつたい……。」

あけち「よかった、こばやしさん」

こばやし「せんせい！すいません！名探偵のじょしゆが、なさけない！」

あけち「いや、わたしもぬいぐるみにされてるし。なにもいえんよ。」

主人公「たしかに……。それで、こばやしさん、いつたいなにがあったんですか？」

こばやし「せんせいは、はんにんのかおをみましたか？」

あけち「いや。はっ……まさか。」

こばやし「はい。みました、ハッキリと。おねがいます。どうか、どうかせんせいと
きょうりよくして、あのきょうあくはんをつかまえてください。おねがいます。」

主人公「……がんばります。」

こばやし「よかったー。はあ、なんか安心したらおなかがすいちゃいましたね。

れいぞうこおかりしますね。」

主人公「え！？ちょっと！ちょっとまってくださいよー。」

あけち「はっはっはっは。きょうは、こばやしさんのおいしいごはんがたべれるなあ。」

あんてん

あけち「なんだ!？」

主人公「て、ていでん？」

???「ぜーったい、手に入れてみせるんだから。」

Fin

エンディングきよく イントロがながれる

こばやし「あら。まっくらになって、一体なにがおこったんでしょうね。ここでだい2わはおし
まいです。名探偵になるには、うたとダンスもかんぺきにしなければなりませんよ？」

《うた》

きょうから、キミは名探偵。どんなナゾも、かかってこ
い。

まいにちおきる できごとは ぜんぶ ほうんとうは たからもの。

あさはねむいよ。ずっとねむっていたい。だけどねてたら、ともだちにはあえない。
あそんで、ねむって、けんかして。べんきょうだってやってるよ。

いっぱいやることあって。へとへとにつかれちゃって。
やりたいこと さいごになって。なんだかいやになっちゃって。
でもね、わたしは、すきなこと さがしてく。

わたしのいちばんの たからもの。どこにあるんだ、みつけるぞ。
まいにち おきる できごとに、ぜんぶ ほんとうは つまってる。

きょうからわたしは名探偵。どんなナゾでもかかってこい。
まいにち おきるできごとは、ぜんぶ ほんとうは たからもの。
みつけるぞ。わたしは名探偵！

